

1718

驅遂艦澤風水船覆沒事件

書類

昭和二年九月二十九日起案
起案者捺印
月 日發付
發付掛捺印

主務局、部
取扱者捺印
發付後起
案者捺印

(事務) 軍務局長
第一課長

大臣

次官

副官
書記官

人事局長

第一課長

法務局長

局長

局長

局長

局、部	受月日	發月日
官房		
軍務		
人事		
教育		
軍需		
醫務		
經理		
建築		
法務		
艦政		
軍令		

仰裁

昭和二年九月二十九日決裁

駁逐艇隊凡水艇西復沒事件查詢會組織ノ件
本件、関シ別紙電一通横須賀鎮守府司令長官ヨリ上申アリ
タルニ付テ本査問会々左記ノ通組織ト可然哉

番號
房機密第一一八號

1211

取扱
指定

右仰高裁

洋

年

記

委員長

大佐 高橋雄三郎

(日進航長)

委員

少佐 清水長吉

(瀨凡 駒延航長)

委員

少佐 難波 心

(久凡 駒延航長)

委員

少佐 佐藤慶藏

(仲凡 駒延航長)

委員

少佐 佐原 理市

(日進航長)

委員

法務官 井原竹治郎

書記

録事 松尾重夫

人事局

法務局

軍務局

1721

昭和二年九月二十八日 午後三時五分 横須賀海軍省著

發信者 横須賀鎮守府司令長官

受信者 海軍大臣

電報譯 (晴平)

駆逐艦澤風九月二十三日長浦入泊之際港務部所屬
水船卜触衛一覆没セシメタルニ付査問會ヲ組織セラレ後
高左記 諸官長ヲ委員ニ任命セラレ度

委員長 大佐 高橋 雄三郎 (自道艦長)

委員 少佐 清水 長吉 (難船艦長)

少佐 難 波 正 (笑凡艦長)

少佐 佐 藤 慶 藏 (神尾艦長)

横須賀 佐 原 理 市 (日進艦長)

海軍

横須賀海軍十三行部紙

2.9.29

2.9.29

1723

生野(三)

人事局

法務局

軍務局

備考

五二〇三

昭和二年十月十八日

駆逐艦澤風水船西復没事件査問會

委員長海軍大佐高橋雄三

海軍大臣岡田啓介殿

第一課長 局員 關スル件

駆逐艦澤風水船西復没事件ニ關シ本査問會ニ於テ調

査候要別紙査定書ノ通議定候條査問會規則第

十六條ニ依リ査定書正副一通及意見書並証憑書

類相添ハ

右報告ス

(終)

官房機密第一九二九

海

軍

十月廿四日 官房受

法務局 2.11.9 接受

10.25

査定書

駆逐艦澤風水船覆没事件ニ付査定スルノ左ノ如ク

第一事 實

駆逐艦澤風ハ駆逐艦長海軍少佐森口重市操縦ノ下
 ニ昭和二年九月二十三日午前九時長浦二十六番浮
 標ニ出船ニ繫留ノ目的ヲ以テ長浦港内ニ入りシニ
 當時風速十五米風向北ニテ操縦意ノ如クナラス繫
 留困難ナルヲ感シ寧ロ港外ニ出テ回頭後「入船」ニ
 繫留ノコトニ決心シ港外ニ向フ當時「特三番」ニ繫
 留ノ軍艦北上ヲ左ニ見テ軍艦古鷹ヲ阿武隈間ヲ
 通過セムトシ原速力十二節ニテ航行中同九時三十
 九分頃北上附近ニ於テ阿武隈ノ後方ニ當リ水船ヲ

函船ニ一隻宛横付曳航ノ曳船第一横須賀(三〇〇)噸)ヲ認メ直ニ前進微速ニ轉テ令セシモ該曳船ハ阿武隈ニ向テモト判断シ依然豫定ノ如ク航行セリ同九時四十一分頃古鷹ノ艦尾ニ來リシ時澤風風馳逐艦長ハ前記曳船カ豫期ニ及シ取舵ニ轉舵セシヲ認メ其ノ儘進航セハ衝突ヲ免レサルヲ感シ直ニ「サイレン」長一聲ヲ吹鳴セシメ該船ニ注意ヲ喚起スルト同時ニ「取舵一杯」後進全速ヲ令セリ此ノ時曳船ノ艦長ハ「サイレン」長一聲ヲ短一聲ト判断シ澤風ハ面舵ニテ曳船ノ後方ヲ躲ルモノト過信シ原針路ヲ保持セシカ突然澤風ノ取舵ト後進全速ナハヲ認メ危険ヲ感シ函船機停止右後進全速ヲカケ右ニ回頭シ僅ニ後退ノ行足ツカントスル時停

止セリ

同九時四十三分澤風ハ略々前進力及回頭力止マリ

風ニ立テ曳船ト五〇乃至六〇米ノ距離ヲ以テ互ニ

殆平行ノ對勢トナリシヲ以テ兩舷機ヲ停止セリ

澤風驅逐艦長ハ最早危險ヲ脱セシモト判断シ當

時風速十五米ニシテ停止ノ儘ニテハ風下側ニ壓流

セラルル危険ヲ感シ同九時四十五分「兩舷機前進半

速」ヲ宣候レヨ令シ主トシテ注意ヲ前方ノ軍艦由

良ニ向テ前進セシニ意外ニ曳船ト接近シタル為

澤風ノ後部上甲板ヨリ七八本ノ竿ヲ以テ水船ヲ

突張リタルモ及ハス遂ニ澤風ノ右舷後部ト

水船ノ左舷後部ト觸衝セリ

澤風驅逐艦長ハ其ノ撃動ヲ感スルヤ直ニ

機 械 ヲ 停 止 セ シ ヲ 推 進 器 ノ 第 一 第 二 翼 水
 船 = 觸 レ 為 = 推 進 羽 翼 二 枚 ヲ 毀 損 シ 水 船
 左 舷 後 部 = 擊 孔 ヲ 生 シ 同 九 時 五 十 分 十 二
 番 浮 標 ノ 南 東 一 八 〇 米 = 於 テ 僅 = 船 首
 ヲ 水 面 = 露 出 シ 後 部 ハ 沈 没 シ テ 海 底 = 膠
 着 セリ
 而 レ テ 之 カ 為 受 ク タル 損 害 ハ 双 方 合 セ テ 約
 金 式 千 四 百 六 十 圓 ナリ

第 二 原 因

(一) 澤 風 ヲ 曳 船 ノ 注 意 ヲ 喚 起 スル 為 短 一 聲
 ト 誤 解 セ ラ レ 易 キ 長 一 聲 ヲ 發 シ タル 為 不 幸
 = 曳 船 ヲ シ テ 短 一 聲 即 面 舵 = 轉 舵 ノ 信
 号 ト 判 断 セ シ メ タル ハ 觸 衝 ノ 一 因 = シ テ 彼 我

ノ行足若停止シタル際澤風駆逐艦長ハ最早危
險ヲ脱セシモト判断シテ西艦前進半速ニ次テ宜
候レヲ令シ前方ノ警戒ニ専念ノ餘曳船ニ對
シ深ク考慮ヲ拂ハサシテトハ本件ヲ惹起セシ主因ナ
リ

(二)

曳船第一横須賀カ澤風ノサイレンニヨリ同駆逐
艦カ面舵ニ轉舵スルモト信シタルハ止ムヲ得ナリト
スルモ對手船ニ對スル注意充分ナラザリシ為
澤風ノ運動豫期ニ及シタルヲ認メタル時期後レ
ニニ接近スルニ到リシハ觸衝ノ一因ナリ

第三 責任

本件觸衝ノ原因前記ノ如クナルヲ以テ

一、澤風駆逐艦長海軍少佐森口重市主トシテ其ノ責

ニ任セサルヘカラサルモ當時聯合艦隊入泊中ニシテ碇泊艦
船輻輳シ航路狹隘ナリント強風ノ為艦ノ操縦困
難ナリン等情狀酌量ノ餘地尠ナカラサルヲ以テ
懲罰處分ヲ相當ト認ム

ニ曳船第一横須賀艦長横須賀海軍港務部舟夫
長渡辺英二ハ對手船ノ行動ニ深ク留意セサリン
點ニ付一部ノ責ヲ免レスト雖澤風ノ「サイレン」ニヨ
リ同曳船艦カ面舵ニ轉舵スルモノト信シタルハ止ム
ヲ得サルトコロニシテ尚水船曳航中操縦困難ナルニ關
シテ接近後ノ行動概テ適切ナリシヲ以テ誠告處分ヲ相當ト思料ス
右査定ス

昭和二年十月十八日

駆逐艦澤風水船衝突事件査問會

委員長海軍大佐 高橋隆三郎

委員海軍法務官 荻原竹治郎

委員海軍少佐 清水長吉

委員海軍少佐 荒波正

委員海軍機關少佐 佐原理市

委員海軍少佐 佐藤慶藏

意見

近來艦船接觸事件ノ跡ヲ見ルニ其ノ多クハ操縦者及其ノ部下何レモ何等危険ヲ感セサル間ニ事件ヲ惹起スルコト多シ是艦船乗員ノ未タ經驗乏シキニ基因スルモノニシテ是カ對策ヲ講スルハ目下ノ急務ナリト信ス

昭和二年十月十八日

海軍艦隊風水船衝突事件査問會

査定書

駆逐艦澤風水船覆没事件ニ付査定スルノ左ノ如シ

第一事 要旨

駆逐艦澤風ハ駆逐艦長海軍少佐森口重市操縦ノ下
 ニ昭和二年九月二十三日午前九時長浦二十六番浮
 標ニ出船ニ繫留ノ目的ヲ以テ長浦港内ニ入リシニ
 當時風速十五米風向北ニテ操縦意ノ如クナラス繫
 留困難ナルヲ感シ寧ろ港外ニ出テ回頭後「入船」ニ
 繫留ノモトニ決心シ港外ニ向テ當時「特三番」ニ繫
 留ノ軍艦北上ヲ左ニ見テ軍艦古鷹阿武隈間ヲ
 通過セムトシ原速カ十二節ニテ航行中同九時三十
 九分頃北上附近ニ於テ阿武隈ノ後方ニ當リ水船ヲ

兩舷ニ一隻宛横付曳航ノ曳船第一横須賀(三〇〇)噸ヲ認メ直ニ前進微速
 事ヲ令セシモ該曳船ハ阿武隈ニ向フモノト判断シ依然豫定ノ如ク航行セリ
 同九時四十分頃古鷹ノ艦尾ニ來リシ時澤風馳逐艦長ハ前記曳船カ豫期ニ及シ取舵ニ轉舵セシ
 ヲ認メ其ノ儘進航セハ衝突ヲ免レサルヲ感シ直ニサイレン長一聲ヲ吹鳴セシメ該船ニ注意ヲ喚起スルト同時ニ取舵一杯ニ後進全速ヲ令セリ
 此ノ時曳船ノ艦長ハ「サイレン」長一聲ヲ短一聲ト判断シ澤風ハ面舵ニテ曳船ノ後方ヲ躲ルモノト過信シ原針路ヲ保持セシカ突然澤風ノ取舵ト後進全速ナハヲ認メ危険ヲ感シ兩舷機停止右後進全速ヲカケ右ニ回頭シ僅ニ後退ノ行足ツカントスル時停

止セリ

同九時四十三分澤風ハ略々前進力及回頭情カ止マリ

風ニ立チ曳船ト五〇乃至六〇米ノ距離ヲ以テ互ニ

光平行ノ對勢トナリシヲ以テ兩舷機ヲ停止セリ

澤風駆逐艦長ハ最早危險ヲ脱セシモト判断シ當

時風速十五米ニシテ停止ノ儘ニテハ風下側ニ壓流

セラルル危險ヲ感シ同九時四十五分「兩舷機前進半

速」ヲ宣候レヲ令シ主トシテ注意ヲ前方ノ軍艦由

良ニ向ケ前進セシニ意外ニ曳船ト接近シタル為

澤風ノ後部上甲板ヨリ七八本ノ竿ヲ以テ水船ヲ

突張リタルモ及ハズ遂ニ澤風ノ右舷後部ト

水船ノ左舷後部ト觸衝セリ

澤風駆逐艦長ハ其ノ撃動ヲ感スルヤ直ニ

二字加



二字訂



右舷

機ヲ停止セシモ推進器ノ第一第二翼水
 船 = 觸レ為 = 推進羽異二枚ヲ毀損シ水船ハ
 左舷後部 = 撃孔ヲ生シ同九時五十分十二
 番浮標ノ南東一八〇米 = 於テ僅 = 船首
 ヲ水面 = 露出シ後部ハ沈没シテ海底 = 膠
 着セリ

而シテ之為受ケタル損害ハ双方合セテ約
 金 貳千 百六十圓ナリ

第二原因

一) 澤風カ曳船ノ注意ヲ喚起スル為短一聲耳
 ト誤解セラレ是キ長一聲耳ヲ發シタル為不幸
 ニモ曳船ヲシテ短一聲耳即面舵 = 轉舵ノ信
 辨ト判断セシメタルハ觸衝ノ一因ニシテ彼我

一行足若停止シタル際澤風颯逐艦長ハ最早危
險ヲ脱セシモト判断シテ西艦前進半速ニ次テ宜
候ニテ令レ前方ノ警戒戒ニ専念ノ餘曳船ニ對
シ深ク考慮ヲ拂ハサリレトハ本件ヲ惹起セシ主因ナ
リ

(二)

曳船第一横須賀カ澤風ノ「サイレン」ニヨリ同颯逐
艦カ面舵ニ轉舵スルモト信シタルハ止ムヲ得サリレト
スルモ對手船ニ對スル注意充分ナラサリレ為
澤風ノ運動豫期ニ及シタルヲ認めタル時期後レ
至ニ接近スルニ到リレハ觸衝ノ一因ナリ

第三 主因 在

本件觸衝ノ原因前記ノ如クナルヲ以テ

一、澤風颯逐艦長海軍少佐森口重中主トシテ其ノ責

ニ任セサルヘカラサルモ當時聯合艦隊入泊中ニシテ碇泊艦
船輻輳シ航路狹隘ナリント強風ノ為艦ノ操縦困
難ナリン等情狀酌量ノ餘地尠ナカラサルヲ以テ
懲罰處分ヲ相當ト認ム

ニ 我艦第一横須賀艦長横須賀海軍港務部無失

長渡辺英二ハ對手船ノ行動ニ深ク留意セザリン

點ニ付一部ノ責ヲ免レスト雖澤風ノ「サイレン」ニヨ

リ同逐艦カ面舵ニ轉舵スルモノト信シタルハ止ム

ヲ得サルトコロニシテ尚水船曳航中操縦困難ナルニ關

シス接近後ノ行動概不適切ナリヲ以テ誠告處分ヲ相當ト思料ス

右査定ス

昭和二年十月十八日

駆逐艦澤風水船覆没事件査問會

委員長海軍大佐 高橋三郎

委員海軍法務官 萩原竹治郎

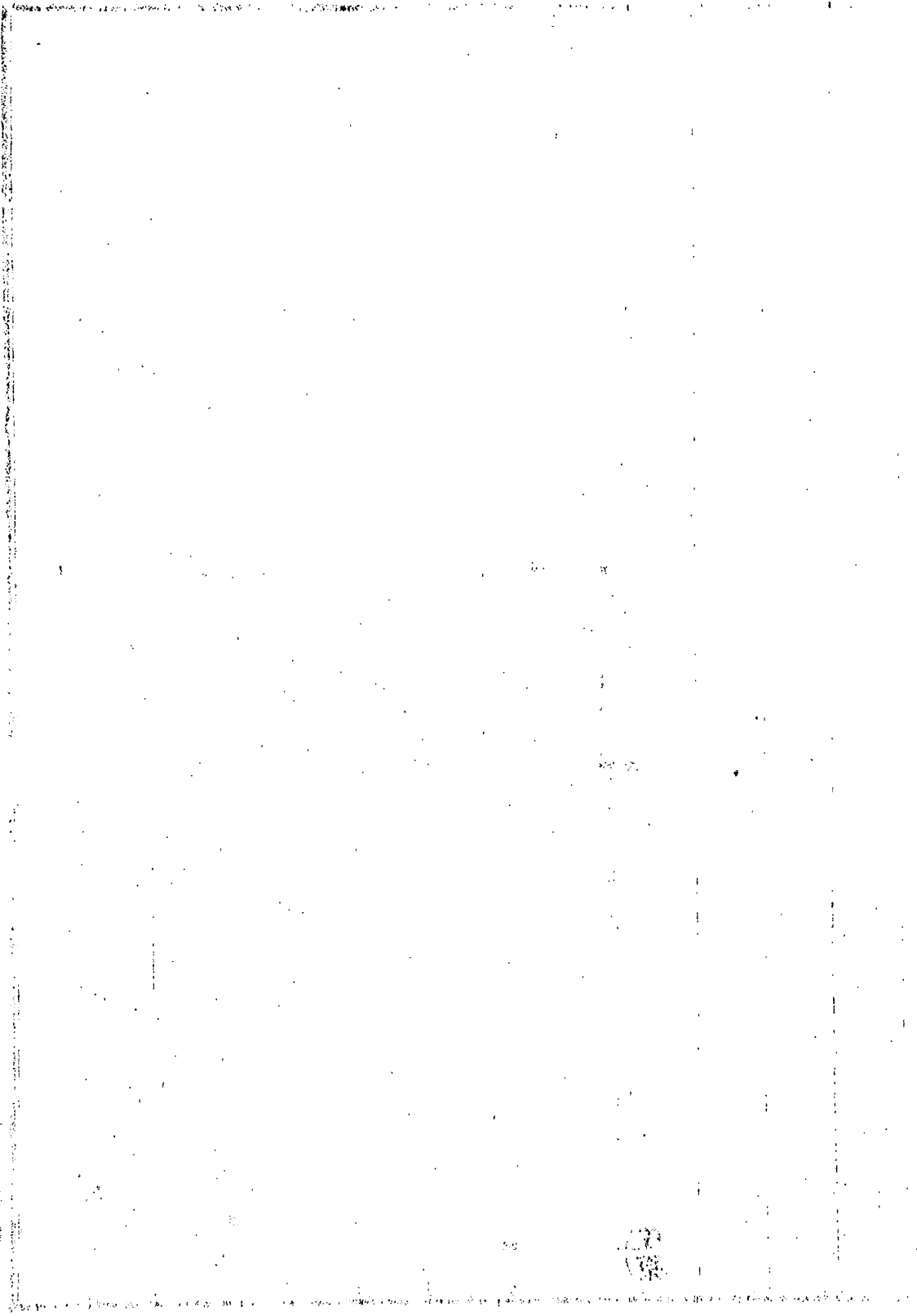
委員海軍少佐 清水長者

委員海軍少佐 経波正

委員海軍機関少佐 佐原理市

委員海軍少佐 佐藤慶藏

1739



意見

近來艦船接觸事件ノ跡ヲ見ルニ其ノ多クハ操縦者及其ノ部下何レモ何等危険ヲ感セサル間ニ事件ヲ惹起スルヲ多シ是艦船乗員ノ未タ經驗乏シキニ基因スルモノニシテ是カ對象ヲ講スルハ目下ノ急務ナリト信ス

昭和二年十月十八日

颯逐艦澤風水船覆没事件査問會

駭逐艦擢風水船西復沒事件查問證憑書

書類目録

- 一 公稱第二四七号水船沈没願末報告
- 一 駆逐艦澤風水船觸衝事件報告
- 一 駆逐艦澤風水機関故障缺損報告
- 一 駆逐艦澤風水船觸衝事件詳報
- 一 澤風駆逐艦長森口重市陳述録取書
- 一 澤風航海長天本益二陳述録取書
- 一 澤風信舞員芳賀軍治陳述録取書
- 一 第一横須賀艦長邊英二陳述録取書
- 一 澤風砲術長小龍久雄陳述録取書
- 一 駆逐艦澤風水船觸衝_二損害程度_一件

(六)

海軍

横濱機密第四八號

昭和二年九月二十四日

横濱賀賀海軍港務部長

横濱賀賀鎮守府司令長官殿

公稱第二二回七號(一五。噸積電傷ホンゴ付)

水船沈没顛末報告

一 般 經 過

横濱賀賀海軍港務部所屬公稱第二二回七號水船
昭和二年九月二十三日午前九時五十分長浦港
外沖十二番浮標、南東約一八。米ニ於テ驅逐
艇澤風卜觸衝、結果船底ニ破孔ヲ生シ其ノ位
置ニテ浸水沈没セリ

二 當 時 ノ 状 況

横濱機密第八五號、回

昭和二年九月廿四日

海 軍

海軍

第一横須賀(三。噸曳船)ハ古鷹及能登呂ニ水
 船配給ノ命ヲ承ケ二十三日午前九時兩舷ニ水船
 一隻宛ヲ横付曳航シテ本部ヲ出發セリ時ニ風向
 北風速約十三米ナリ
 同九時四十分頃阿武隈(沖八番浮標ニ繫留中)ノ艦
 尾ヲ過キ古鷹(沖十三番浮標ニ繫留中)ノ右舷側
 ニ逆ニ着ケテ曳船ノ右舷側ニ曳航中ノ水船(公稱
 第四四一號)ヲ古鷹ニ渡ス目的ヲ以テ適宜操縦
 進行中圖示A點ニ於テ驅逐艦澤風ヲB點ニ認メ
 タルヲ以テ約一點面舵ニ變針シ澤風ノ行動ニ警戒
 シツツ進行ヲ續ケC點ニ到リ古鷹ニ向首セシトキ澤
 風カD點ニ於テ汽笛短一聲ヲ發シタルヲ見テ澤風ハ
 面舵ヲ執リ曳船ノ後方ヲ交ルモノト判断シ其ノ儘

昭和二、一合井納

海軍

針路速カヲ保テ進行セシニ突然同艦ヲ取舵ヲ執
 リ後進ヲカケツツアルヲ見テ初メテ危険切迫セシヲ覺
 リ已レモ亦機械停止續イテ右後進全速續イテ兩
 舷後進全速ヲカケ艇ニ後進ノ行足僅カニワキタルトキ
 機械ヲ停止セシカコトキ澤風ハ右前進半速ノ信
 號ヲ掲ケツツ曳艇ヲ追ヒ越シタリ此ノ時水艇ニコカリカ
 ト言フ音ヲ發シタルヲ聞キ間モナク水艇ハ急ニ後方
 ヨリ沈ミ始メテ十前九時五十分頃十二番浮標ノ
 南東約一八〇米圖示目點ニ於テ艇首ヲ約五米
 水面ニ露出シ沈没セリ

右報告ス

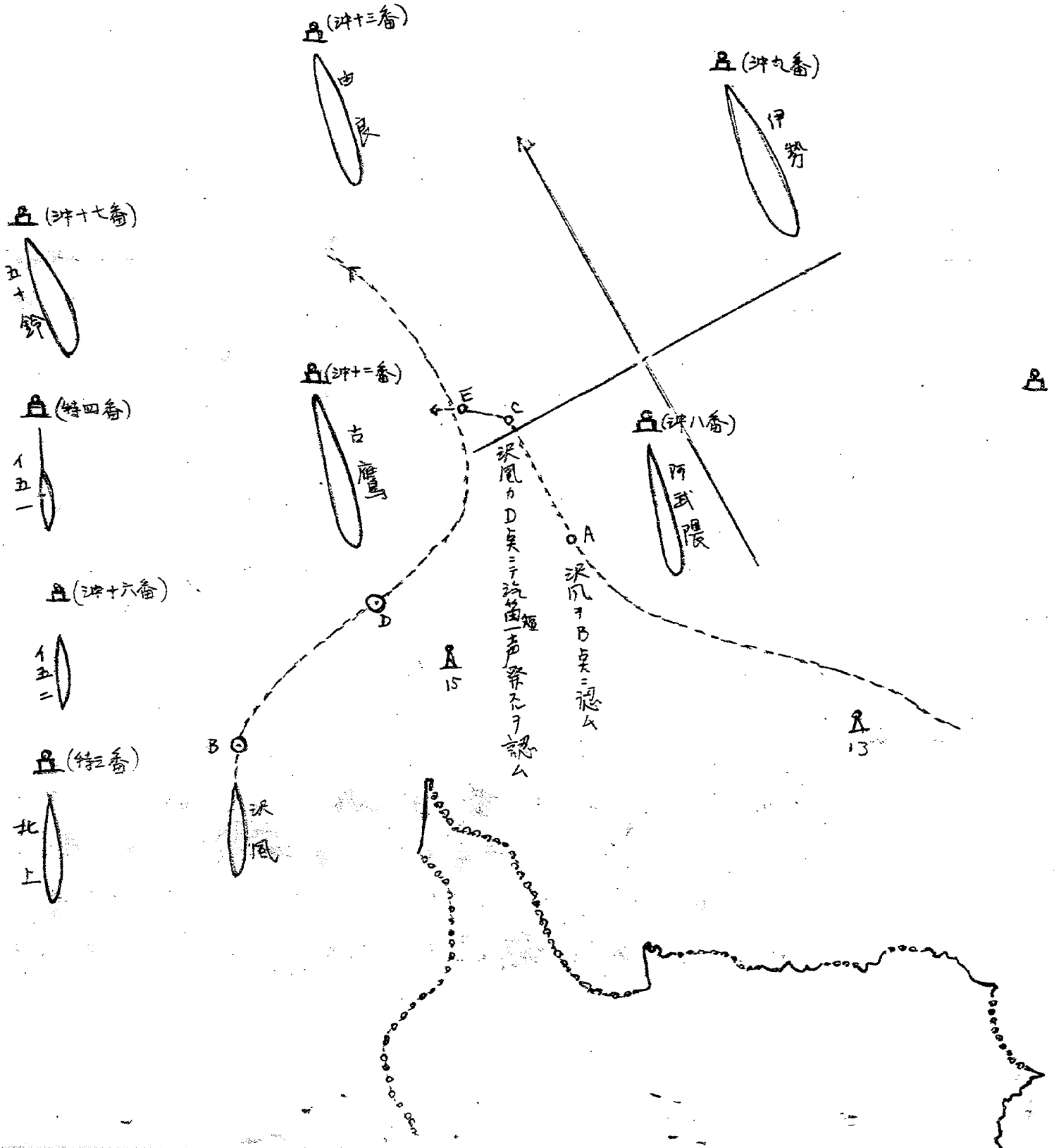
(別圖壹葉添)

昭和二、二合井納

艦

皇 (沖十四番)

皇 (2)



海軍

昭和二年九月二十三日

第二驅逐隊司令

大 橫 鎮 長 官 大 要 司 令 官 殿

驅逐艦澤風水船觸衝事件報告

一 驅逐艦澤風水船觸衝事件報告

長浦港外沖十六番浮標ノ南口東約二百米ニ於テ水船ト觸衝セリ

二 當時ノ状況

本艦昭和二年九月二十三日午前九時長浦二十六番浮標ニ繫留ノ目的ヲ以テ港内ニ後進シテ入港セシニ當時風力十五米風向北ニ黒岩鼻附近ニ於テ真ニ儘ニテハ繫留困難トナリシヲ以テ入船ニ繫留事

三 驅逐隊長官一三三號

昭和二年九月

海軍

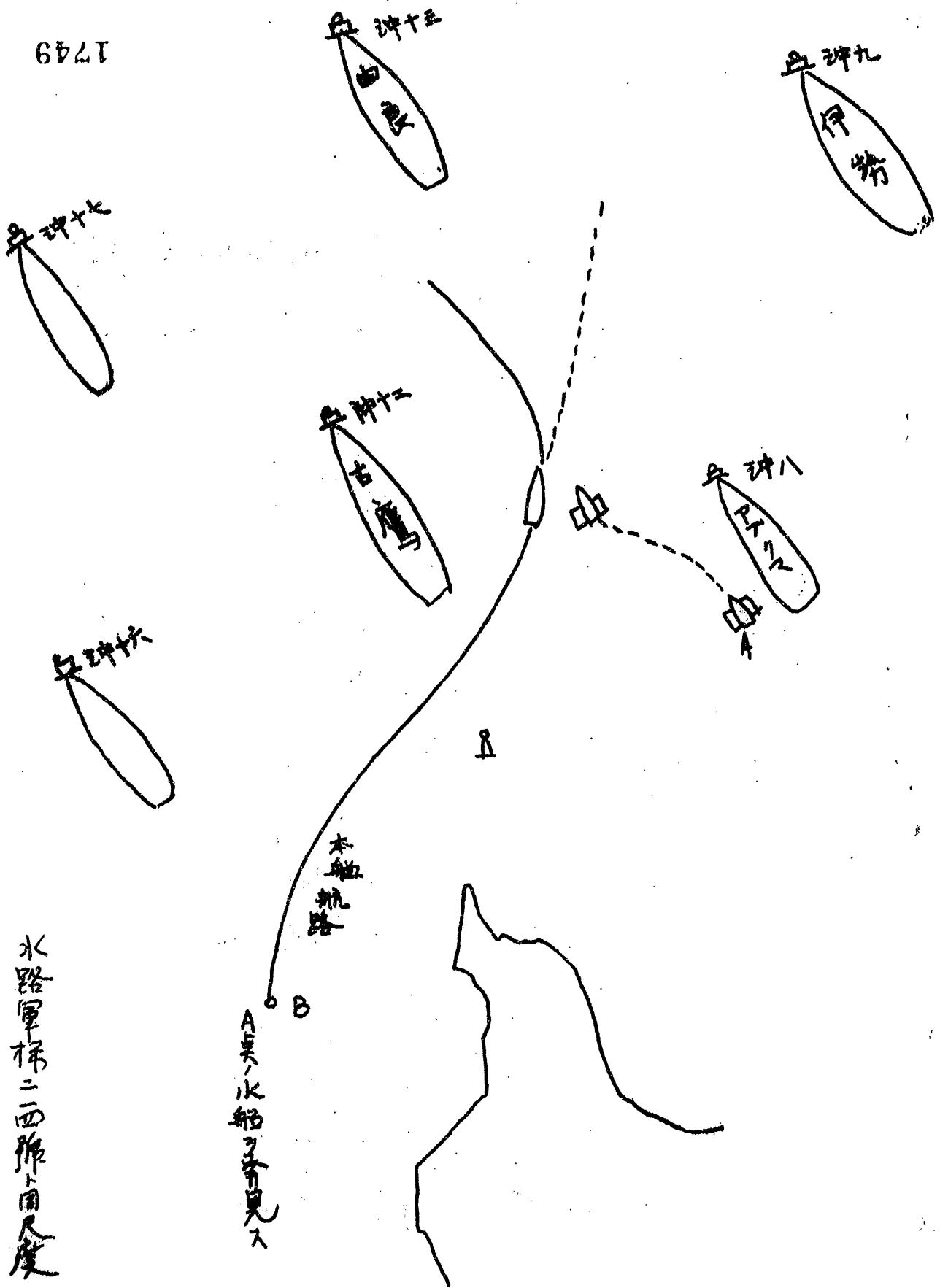
ニ決心シ再ニ港外ニ出港シ圖示ノ如ク原速力航行中
 B點ニ於テA點ニ曳船テ水船ヲ兩脇ニ曳航セルヲ
 認メ直ニ前進微速ヲ令セ老該船ハ阿武隈ニ向テ是
 ノト判断シ由良伊勢ノ間ヲ通過セントセルニ突
 然水船カ本艦ノ方向ニ向テ來リテ以テ氣味甚ニテ
 注意ヲ喚起スルト同時ニ取舵一杯後進人全速ニ漸
 ク衝突ヲ免レシ是前方ニ由良アリテ艦尾カ水船ニ
 觸レントスルヲ防ク為メ面舵ヲ取ル能ハス遂ニ午
 前九時四十五分本艦ノ尾ト水船ト觸衝スル
 ニ至レリ

右報告ス



昭和二二令并納

1749



水路軍標ニ西條ノ南度

海軍

驅逐艦澤風機関故障鉄損報告

年月日	故障鉄損の位置	故障鉄損程度	故障鉄損箇所	處置概要	修理工費の概算
二一九一三	右舷推進器箱裏 二枚	第一、二種表の調整 損つた	水缸下の補修 為	全刀弁調整 完了 二種表の調整 完了	未定

昭和二一年井納

潜水夫ニテ検査シタル状況

第一翼 殆ンド圓狀ナリ

第二翼 尖端ハ短ク欠ケタル所アリ

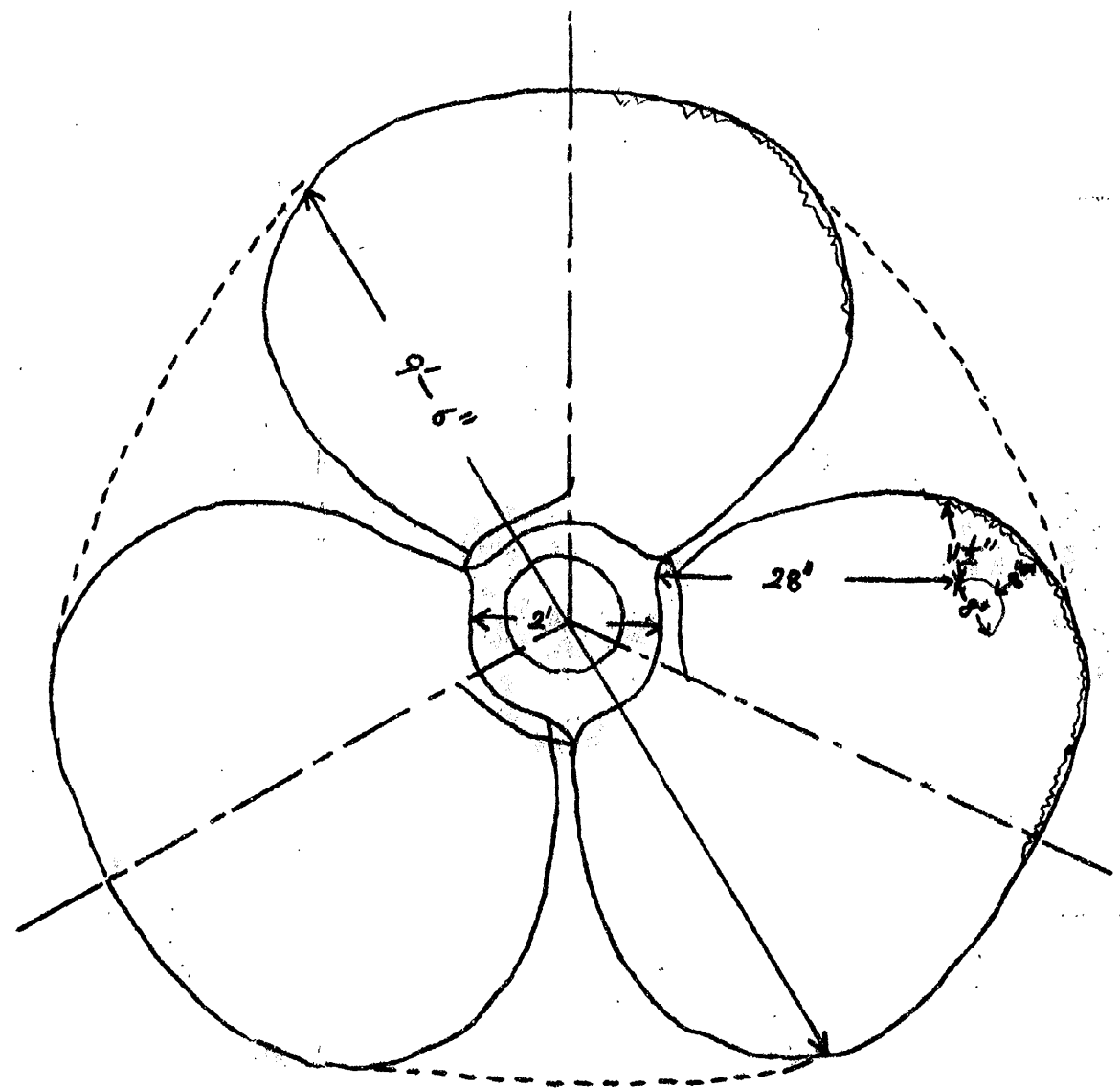
第三翼 尖端波形ニ曲ラレタル所アリ

四角ノ如ク亀裂アリ

但シ該亀裂ハ大正十四年五月発見シタルモノニ非ズ昭和二年

四月入渠ノ除「セメント」充填シタルモノニシテ今圖ノ

幅約ニテ約一分ハミ達ニシタルモノアリ



横濱機務部

海軍

昭和二年九月二十九日

澤風驅逐艦長海軍少佐森口重市

第二驅逐隊司令海軍大佐佃久米太郎殿

驅逐艦澤風水船觸衝事件詳報

一 觸衝當時状況

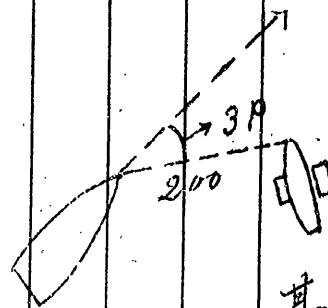
本艦午前九時三十九分頃B點ニ於テA點ニ水船ヲ認メ該船ハ阿武隈ノ艦尾方向ニ見エシヲ以テ該艦ニ横附スルモノト思考シ意ニ介リセス其ノ儘航セシニ九時四十一分頃本艦古鷹ノ艦尾ニ來リレ時水船ノ取舵ニ轉舵セシヲ認メ其ノ儘進航セハ衝突ヲ免レサルヲ感シ直ニ氣笛長一聲ヲ發テ該船ニ注意ヲ喚起スルト同時ニ取舵一杯後進全速ヲ

横濱機務部 八五七號 向

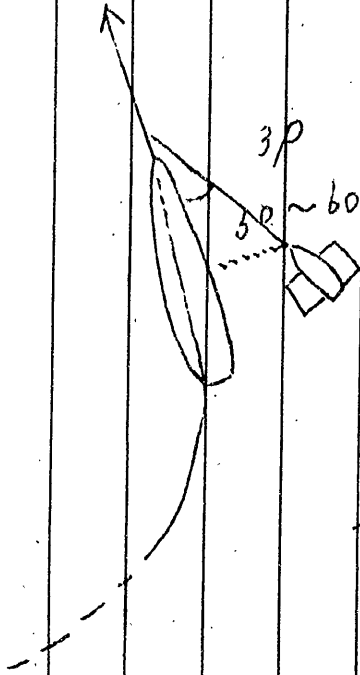
昭和二年九月二十九日

今ス

其ノ時、對勢上圖、如シ



九時回十三分漸ク衝突ヲ免レ本艦前進ノ行足及回頭
 情カ止マリ上圖ノ對勢カトナリテ以テ兩艦停止セリ



海軍

昭和二、二合井納

海軍

依テ最早危期ヲ脱セシモト認メ當時風速十五米ニテ
 停止ノ儘ニテハ風下側ニ圧流セラレル危険ヲ感セシヲ以テ
 九時四十五分兩舷前進半速宜候ヲ令シ前方ノ由良
 ニ注意ヲ拂ヒ最早何等水船ニ考慮ヲ拂フ事ナク航
 進セシ漸ク二三秒ノ前進惰力附キント思ハレシ頃本
 艦ニ撃手動ヲ感セシヲ以テ直ニ停止初メテ水船カ本艦
 ニ追衝セシヲ知リシ次第ニテ當時機械ヲ直ニ停止セシ
 第一第二翼ニテ水船ニ觸レ第三翼ニテ推進器ノ回
 轉ヲ停止スルヲ得シモノニテ為メニ推進翼ニ枚ヲ毀損
 セシモノト思考ス

水船衝突ノ状況ハ

初メ左舷船首ヲ以テ本艦内火式發電機煙突附
 近ニ衝突シ其ノ反動ニヨリ平行トナリ遂ニ本艦推進

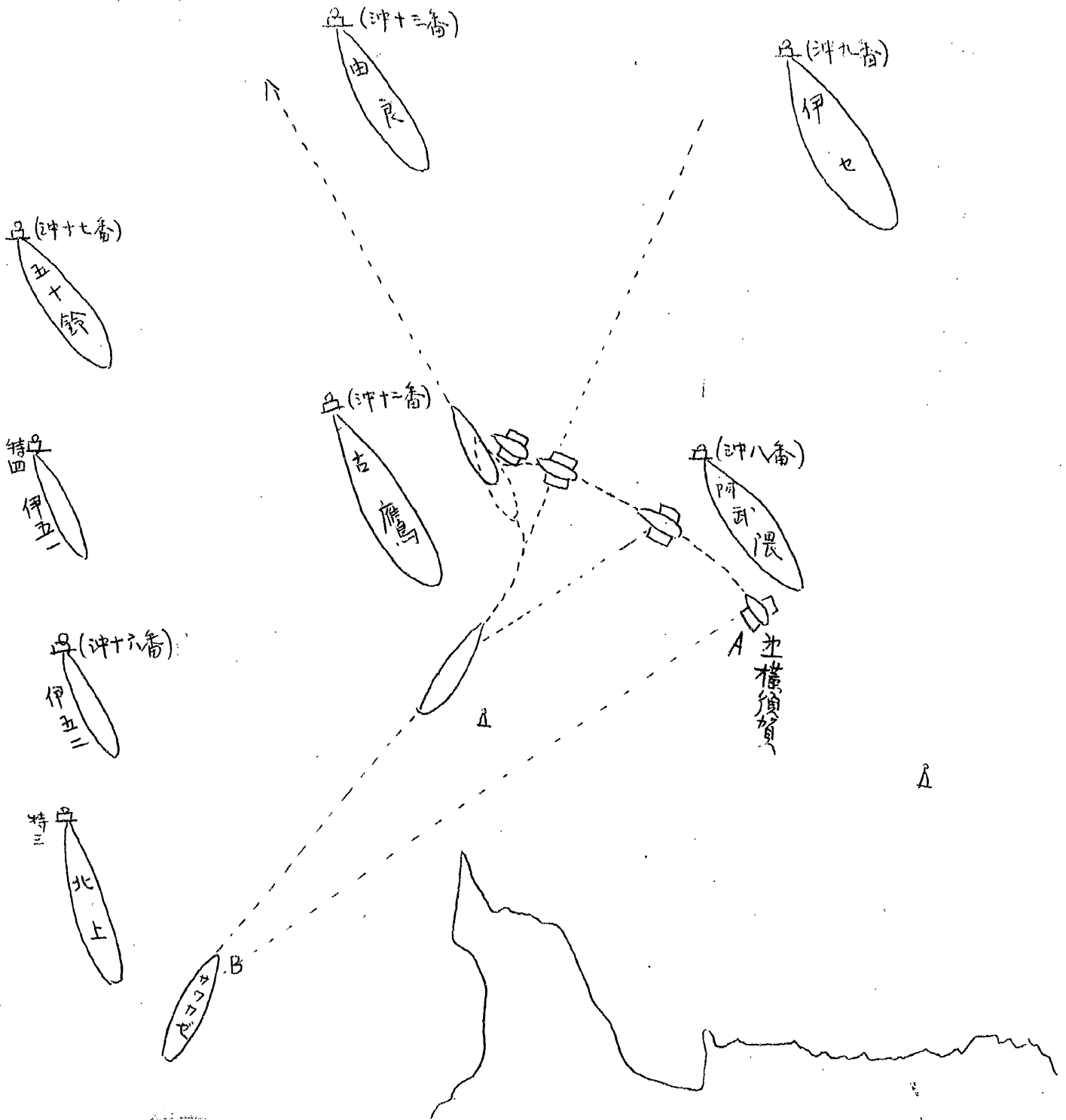
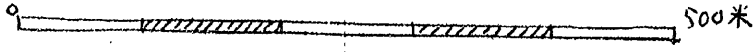
昭和二一年并納

器力水船、後部ニ觸
衝スルニ至レリ

海軍

綱

昭和二、二令并納



澤凡駆逐艦長海軍少佐森重市陸連録取書

一
 本艦は九月二十三午前八時長浦二十六番浮標ニ
 錨留し目的ヲ以テ港内ニ後進ニテ入港シマシ
 カ當時風力十五米由北ニテ黒岩鼻附近ニ
 於テ其ノ停ニテハ錨留困難テアリマシテ入舩
 ニテ錨留ノコトニ決心シ再ニ港外ニ出港ノ途中
 當時特ニ番浮標ニカレル北ニ附近ニ未
 リントキ阿武隈ノ後方ニ水舩ヲ認メマシ
 本艦ニ直ニ前進微速ニシマシタガ該水舩ハ阿
 武隈ノ阿舩尾方向ニ見エマシタ夫テ水舩ハ
 阿武隈ニ横付スルモノト思ヒ意ニ付セズ其ノ
 停續航シマシタ九時四十分本艦古鷹ノ

海軍 艦

船尾附近ニ来リシ時水取ノ取舵ニ轉舵シタリシ
 認メ此後ニ進航セバ衝突ヲ免レナイト危険
 シ感シ直ニ「サイレン」取舵一杯後進全速ヲ
 令シマシタ此ノ時本船々首ト水取トノ距離ハ
 目測ニ當テ三ツテ船首トノ角度ハ三點テアリ
 マシタ

「サイレン」ハ長一聲アリテアリマシ故間違ヒト
 ハ思ヒタセヌテシタカラウモ、後ニシテ墨キマシ
 タ

長一聲アリテ水取ノ注意ヲ喚起スル意味ヲ
 ヤツタリテアリマシ

中夜九時四十分ハ漸ク衝突ヲ免レ本船
 前進ノ行足及回頭力止マリマシタトキ

一、 兩船停止シマシタ。空ノ時本船ハ殆ト風ニ立
ワテ居リ水船ハ畧々本船ト平行ニテ五〇
乃至六〇米ノ巨離ニアリマシタ

一、 夫ヲ最早危険ニ脱スモト認メ此後ニ
前進シタナラハ充分交ハルモト思ヒ九時以

一、 十五分兩船前進半速宜候ヲ令シマシタ
水船ト衝突シマシタ。本船ハ前進半速ニ

一、 ヲツテ漸ク二、三節ノ前進増カガ附イタリ
デアリマシタ

一、 停止ヨリ前進半速ヲ令シマシタトキ舵ハ取舵
一杯ニナラテヤタト思ヒシカ宣候ノ令

一、 テ当然舵ハ疾サレタモト思ヒマス
機械ハ何ノ故障モナク思フ程ノ動イタ

事
宜

注 目

ト思ハラス

一 水船ト接近 船衝ノ同際 本船後部ニテハ七八

本ノ竹竿ヨリテ突張リマシタカ 其ノ竹竿ニ

三本ハ折レテ 衝突シタリゲアリマス 之ニ後

テ 部下ヨリ古イタコトデアリマス

一 船衝ノ際 激動ヲ感シマシタリゲ 直ニ兩船停

止シマシタカ 推進器ノ二枚ノ羽翼ヲ以テ 水

船ノ損傷ヲ與ヘテ 推進器ハ止マツタモ

ト思ヒマス

一 水船ノ注意ヲ喚起スルタニハ サイレント長一

聲ヲシマシタリ アノ場合 短ニ聲ヲ以テ

本船ノ進路ヲ適確ニ水船ニ知ラシメナラ

バヨリ一層ヨカク ト思ハラス 然レ長一聲

カ誤ヲテキルトハ考一マセヌ

長一聲ハ吾々ガ善道帆船等ニ注意シ

共一ルトキ常ニ用ヒテキルモノデアリマス

一 水船ト本船ト接近シ危険切迫ノ際ニハ

此旨ヲ船長ニ報告セシモノデアリマス

デシタ

右録取ス

昭和二年九月三十日

於 軍艦 日進

駆逐艦 沢風 水船 衝突 没事件 査問 会

委員長 海軍 大佐 高橋 雄三郎



要 旨

一 沃凡航海長海軍大尉天本益二陳述録取書

一 私ハ衝突當時ズツト艦橋ニ居リマシタ

一 衝突當時ノ艦長ノ精神状態ニ普通ト

變ハリナカッタト思ヒマス

一 艦長カハ気笛ト令セラレタトキハ航海士

カ中へ這入ツテ「長」聲ト云ツタ稱ニ

記憶シテ居ラス其ノ気笛長一聲身ハ五

六秒ノ長サト思ヒマシタ

一 本艦カ取舵一杯後進全速ニテ衝突ヲ免レ

機械ヲ停止シマシタ其ノ時ハ此後航進セ

ハ危険ハナト感ヒテオマシタ

一 本艦カ前進ノ行足ガツキマシタトキ水艀カ

要
旨



洋 宣

意外ニ本艦ニ追接シ危険ヲ感シムダガ
突差ノ激シキヲ艦長ニ報告スル
マリスデシタ
暇取アリ

右
録取ス

昭和二年九月三十日

於 軍艦日進

駆逐艦汎水艇西獲没事件査問会

委員長海軍大佐 高橋雄三郎



沃凡信号員海軍三等兵曹芳賀軍治陳速録取書

一 先笛長一聲、船長ノ命ニヨリ行クマシタ

又ハ水船ノ注意ヲ喚起スルヲト思ヒタ

夕

一 長一聲、五六秒間、長サニヤリマシタ

右録取ス

昭和二年九月三十日

於軍艦日進

駆逐艦沃凡水船西後没事件査問会

委員長海軍大佐 高橋雄三郎



海軍省

横須賀海軍港務部舟長長茂横須賀艦長渡辺英二陳述録取書

一、阿武隈ノ左後方ニテ駆逐艦汎風ヲ「特ニ番」浮標ニ

駆索泊中ノ北上ノ方向ニ認メマシタ

最初汎風ニ古鷹ノ左舷ヲ通航スルモノト思フテ

斗マシタカ其ノ行動ニ注意ヲ拂ヒヤカラテ進行

ヲ續ケテ居リマスト汎風ガ汽笛短一聲ヲ

吹鳴シマシタリテ駆逐艦ニ面舵ヲトツテ曳航

ノ後方ヲ六カトルモノト判断シテ其ノ傍針路

速カヲ保テ進行シマシタ

所ガ突然汎風カ取舵ヲトリ後進ヲカケツ、

アルノヲ見マシテ危険ヲ感じ直ニ兩舷停

止右後進合速ヲカケマシタ此ノタメ知ノ

要
旨

一、 船ハ二十度後任右ニ頭ヲ廻シマシタ

三分間程後進ヲカケテ年マシタカ舳ノ船ノ

前進ノ行足止マリ僅カニ後進惰力カワ

カントスルトキ槓械ハ停止シマシタ

一、 槓械カ停止シマシテカラ舳凡ト舳衝ラシ

タガ舳ノ向キハ互ニ平行テ水舳ノ方ノ後

部ガ澤凡ノ後部ト衝突シタ歎デアリ

マス

一、 衝突リトキ自分ハアノ方法ヨリ外免レル方

法ハナイト思ハシマシタ

一、 衝突間際ニ水舳ノ方ハ乗員少ナク突

張ル用意モ間ニ合ヒマセ又デアリ

右録取ス

昭和二年九月三十日

於軍艦日進

駆逐艦沢凡水艇西獲取事件査問会

委員長海軍大佐 高橋 雄三郎



要
覽